

地域アカデミーin立子山2024  
2024年5月25日（土）

福島の偉人・朝河貫一に学ぶ  
～朝河博士を育んだ立子山の風土検証と共に～

甚野尚志（早稲田大学文学学術院）

# 1. 父・朝河正澄の経歴

正澄は1844年(弘化元年 9 月),二本松城北の鉄砲谷で宗像家の息子として誕生。宗像幸八郎昌武と称する。

修学館での勉学。剣術「小野派一刀流」を学ぶ。

1857年(安政4年),藩の江戸屋敷へ行き滞在。「漢学」,「国学」,「先意流薙刀」,「宝藏院流槍術」を学ぶ。

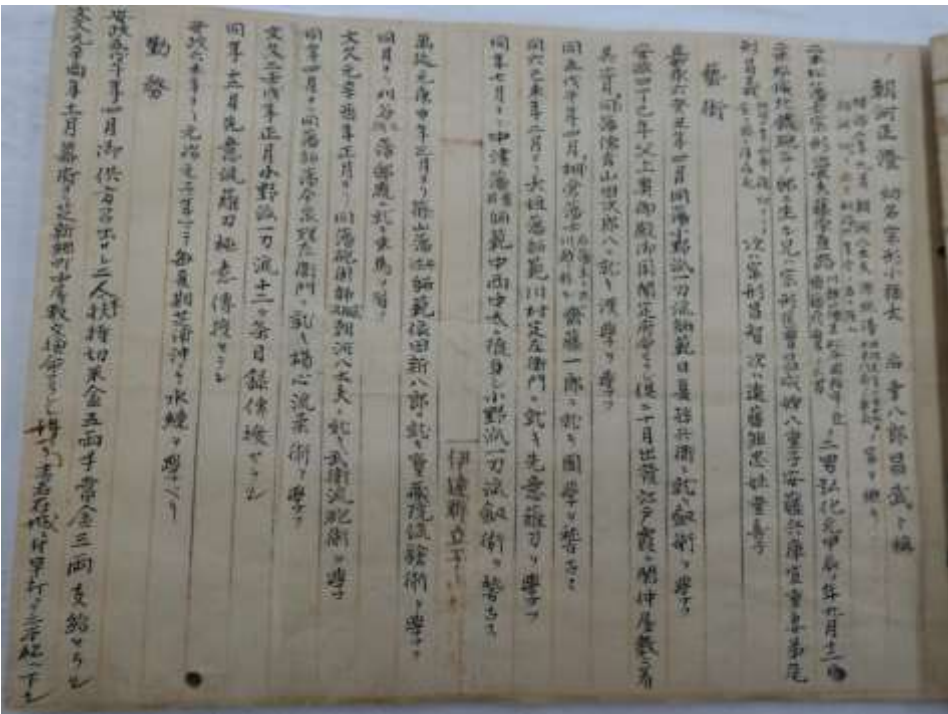
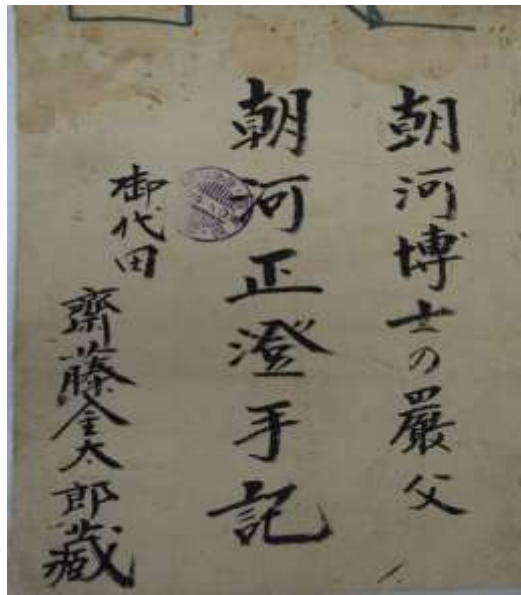
1861年(文久元年),砲術師範の朝河照清に師事し,「武衛流砲術」を学ぶ。「楊心流柔術」を学ぶ。

照清の子の照成は,田口藩士松浦竹之進の長女ウタを娶り家督相続。イク,キミ誕生。照成は天狗党の乱で戦死。戊辰戦争で照清も戦死。

1869年(明治2年),宗像幸八郎昌武が婿養子になり朝河功と改名。貫一の誕生後,名前を正澄と改名。

1874年(明治7年) 8 月,伊達郡立子山小学校に赴任。小学校教員となる際,自身の経歴,戊辰戦争での戦いを『正澄手記』に書く。

(福島県立図書館蔵「朝河貫一資料」AG-21)





## 2. 立子山小学校へ

立子山小学校赴任のきっかけ---朝倉鐵蔵の父,鐵次郎が繭の売り込みで二本松の製糸会社に出入りしていたため,小学校開設時の教員を旧二本松藩士から探し,正澄が推薦される。福島県での養蚕業の発展期。

1874(明治7)年8月7日,正澄着任。

1876年,ウタ没。1877年,梁川の天神社神官の娘エイが後妻。裁縫を村の女性に教える。継母エイは貫一を厳しく指導した。貫一はいつも「瞼の母」(ウタ)を思ったとされる(鈴木喜助『朝河貫一』1953年)。朝河の女性観に影響?

正澄は立子山の教育水準を向上させる。校訓,子守歌の作成。正澄は貫一に,二本松少年隊の悲劇,儒学者・安積艮斎の偉業を教える。貫一は最優秀の成績。

1886年,川俣の高等小学校に転校。二里半の山路を通学。冬は下宿。豆腐を買いよく食べた。英語教師に蒲生義一がいた。初めて英語を習う。

写真(上) 小学校校長室にある正澄と貫一の写真

写真(下) 正澄の校訓と子守歌



### 3.天正寺から学校住宅へ

立子山小学校は天正寺で開校した当時,生徒数は60人余。翌1875年(明治8年)には,生徒数187人に増え,狭くなる。村の中央の字竹の下19番地に学校の新築に着手。地租改正の事業による混乱もあったが,建築用係の宝槻直市らの尽力で,翌1876年7月に開校式。翌年,総二階に改造。二階の東端の二室が教員事務室と校長住宅となる。正澄一家は天正寺から移る。

貫一は1895年に渡米するまで約20年間,立子山小学校の校長住宅を勉学と生活の場とした。自然に囲まれた生活をする。三久保山,栃窪山で百合掘り,蕨取り,田畑の蛍,裏山の蝉の声,紅葉の向い山,雪降り積もる館の山。⇒貫一の人格形成への立子山村の意義。

写真(上) 貫一が天正寺の白壁に落書きした奔馬の絵。

写真(下) 天正寺での朝河貫一記念講演会の様子(2018年10月)



## 4. 「朝河天神」と呼ばれた正澄の教育



正澄のポートレート写真（勲章を付けているので退職時か）岩代福島・田村鐵三郎（福島町での最初の写真館）撮影。写真は立子山・高橋秀雄氏蔵。

正澄は容姿を整え、礼儀作法を正しく守る。校長室には家人といえども無断入室を許さず、つねに羽織袴で威儀を正し、端然と正座して事務を執り書見にふける。天領地で士族がいなかった立子山には珍しかった。「天神様」と呼ばれる。

教育内容---文部省編纂の単語篇、連語篇、小学読本、修身訓を教える。教える精神は儒教思想、武士道精神。

上級生が下級生の学習を見る。卒業生中から成績優秀者を選び助教にする。教育に熱心で、生徒に対しても非常に親切。父兄の信頼も高まる。

明治以前の惰性で就学しない者が多数いた。婦女子には就学を顧みる者が少なかったが、正澄の熱心な勧説により、就学率は向上する。1880（明治13）年には男128人、女99人、計249人になる。青年指導の夜学会も開催した。



## 5. 福島県尋常中学校時代

1888年(明治21年),福島県尋常中学校(福島市)に入学。

1889年(明治22年),同中学校が安積郡桑野村(郡山市)に移転(後に安積中学となる)。

イギリス人の英語教師ハリファックスから英語を学ぶ。英英辞書を暗記。暗記した部分を食べたので「辞書喰い」のあだ名。最後に辞書のカバーを桜の根元に埋める。⇒「朝河桜」

成績はつねに首位で特待生となる。

1892年(明治25年),首席卒業。英語での答辞の演説を行う。ハリファックスは「やがて世界はこの人を知るのであろう」と語る。



## 6. 東京専門学校時代

1892年(明治25年),東京専門学校文学科入学。

同年11月,ハリファックス留任の福島県議会への  
建白書を送る。

中学時代の友人・竹内松治により本郷教会の牧師・  
横井時雄を紹介される。

1893年(明治26年)5月,「基督教に関する一卑見」が  
『六合雑誌』に掲載。キリスト教徒となる。

横井の渡米。ダートマス大学のタッカーから,朝河  
の留学受け入れの確約を得る。

大西祝(哲学者),坪内逍遙(文学者)からの教育。

1895年(明治28年)7月,東京専門学校を首席で卒業。

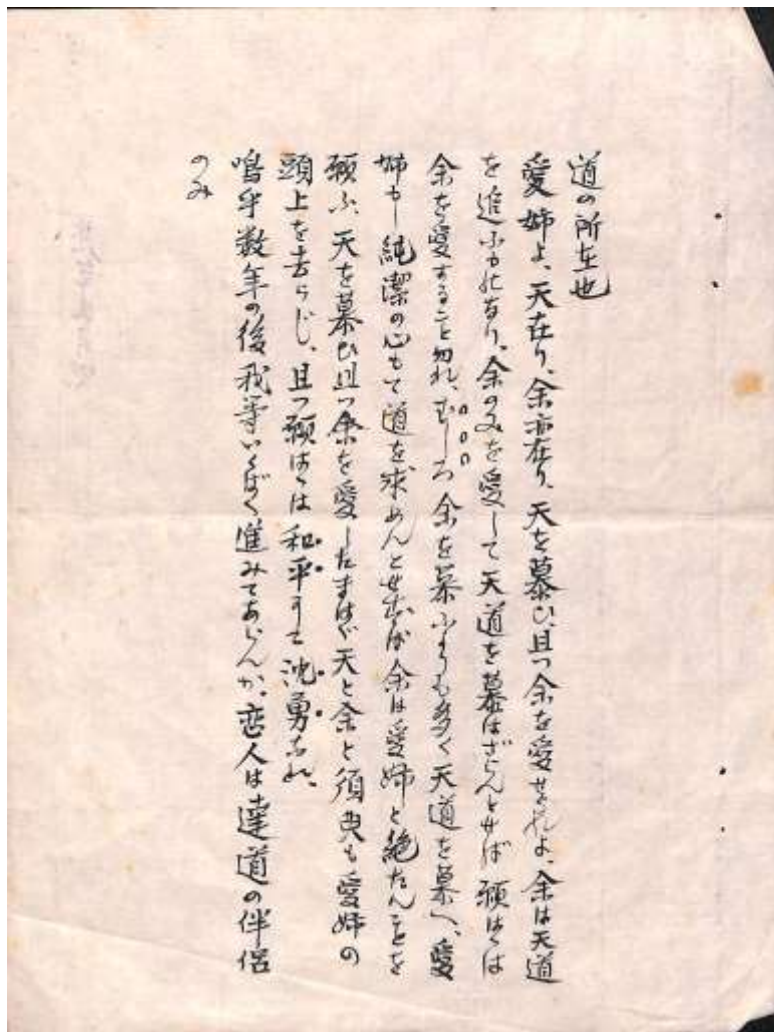
(右の写真) 東京専門学校での成績表。

安達ヶ原ふるさと村先人館所蔵。



## 7. 貫一の恋愛と別れ

安藤ふく宛書簡原本,最終頁。  
立子山・高橋秀雄氏蔵。



貫一は東京専門学校時代の1894（明治27）年の夏,帰省の途中,本宮に立ち寄り,某女性と会い,文通し恋愛感情を抱く。

同年10月25日付の「高橋春吉」宛書簡から,この文通相手が,長井ふくという女性だとわかる。

彼女はその後,朝河の伯母安藤八重の長男・正司のいとこ未嵯夫と結婚後,別れ,長男・信を連れ正司の後妻となる。

貫一は1年ぶりに1895年8月,立子山の実家に滞在中,彼女と再会。結婚し子供のいる彼女との関係に煩悶。渡米を決意した貫一は,9月4日付で安藤ふく宛に別れの書簡を書く。

「--- 愛姉よ,天在り,余亦在り,天を慕ひ,且つ余を愛せられよ,余は天道を追ふものなり,余のみを愛して天道を慕はざらんとせば願はくは余を愛すること勿れ,むしろ余を慕ふよりも多く天道を慕へ,愛姉もし純潔の心もて道を求めんとせずば余は愛姉と絶たんことを願ふ,天を慕ひ余を愛したまはば天と余と須臾も愛姉の頭上を去らじ,且つ願はくは 和平にして沈勇なれ。嗚呼数年の後我等いくばくか進みてあらんか,恋人は達道の伴侶のみ。」

『朝河貫一書簡集』 11.「某日本婦人宛（案）」は同一の書簡。

# 8. 立子山で書いた恋愛の手記

1895月9日の手記の最初の部分。立子山・高橋秀雄氏蔵。



貫一が1895(明治28)年8月,立子山の実家に滞在中,彼女と一年ぶりに再会し書いた手記。本人と再会し,恋愛感情が一気に高まったことが記される。

「然るに帰省の途中愛姉を訪ひて其の家に二泊せし後は凡て一変せり, 愛姉を見しもの昨夏一たびのみ, 一見して恋愛成り立ちしも始めは自識せず, 只其純潔を賞し, 次第二 内部の恋愛意識の表面に浮びしなり, 而して凡て一年間は書面にて往答せしのみ, 固より互ニ恋ふることを明地には告白し得さりき, 即ち相見は昨夏の一日にして, 其の情は一年間書翰の上にて灯え来りし也, 今や一年にして相見たり, 恋人の一眇は一年の応答にまさりて百倍の印象を心 に与ふ。相語れり, 生ける彼女と相語り, 相坐せり, 其の夫と三人同し蚊苗の中ニ臥して, 彼女が呼吸の音すら余が心に吹き入りたる如く覚えき。而して遂に余は愛を告白し得さりき。かくて 相別れたり,」

甚野尚志・藤原秀之「早稲田大学歴史館「海を渡ったサムライ～朝河貫一展」によせて」『早稲田大学文学研究科紀要』 66(2021年)

## 9. 朝河貫一と坪内逍遙

朝河は1892年(明治25年)12月に東京専門学校文学科に入学。坪内から英文学を学ぶ。坪内は朝河の才能を評価し、アルバイトとして神田キリスト教会青年会での英文学講義や英文学書の翻訳を斡旋する。

朝河はアメリカ留学後も多くの親密な書簡を交わす。朝河が坪内に出した書簡の内容は多くが自身のアメリカでの研究に関するもの。坪内ほど自身の研究やイエール大学での境遇を率直に語った文通相手はいない。

朝河の『日本之禍機』出版に坪内は全面的に協力。朝河は最初、この書物の原稿を『日本之危機』の題名でアメリカから坪内に送ったが、坪内の提案で題名は『日本之禍機』に変えられ、1909年(明治42年)に実業之日本社から出版される。

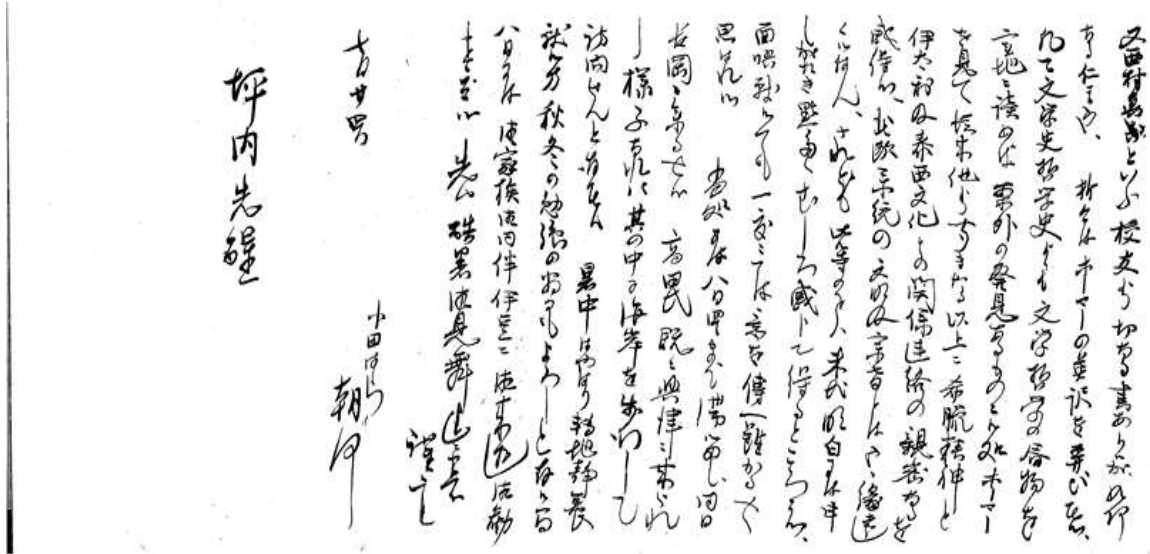
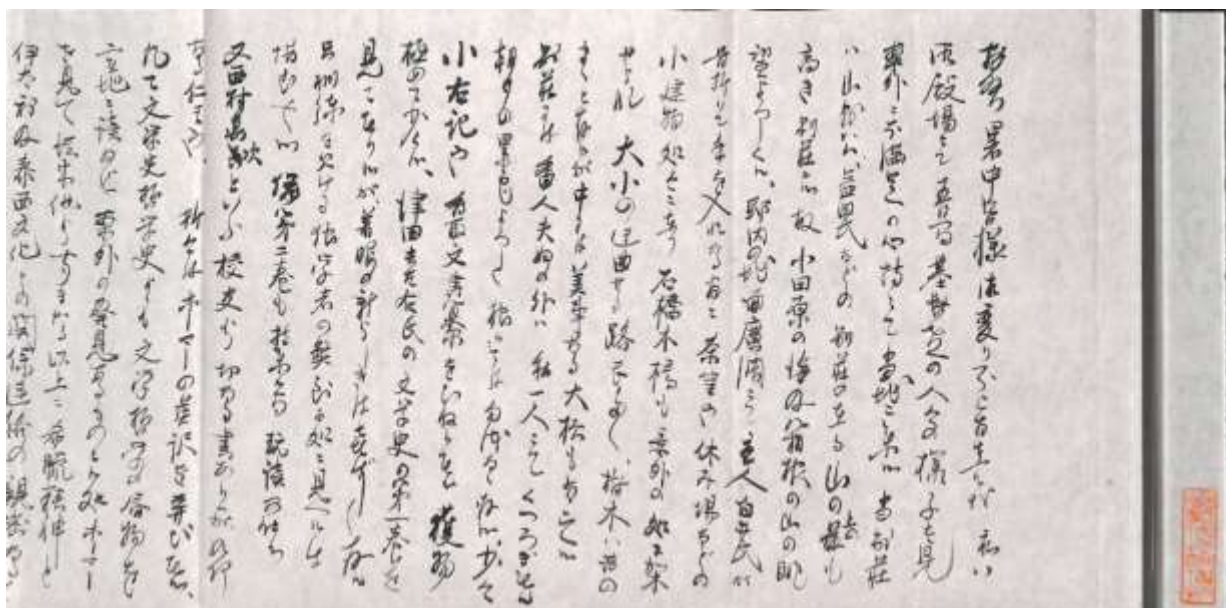
坪内没後、朝河は坪内からの書簡70通を早大演劇博物館に1939年に寄贈。

## 10. 朝河の坪内宛書簡(1918年7月24日付)

早稻田大学演劇博物館蔵。

1917年、第二回帰国時に坪内に宛て書いた書簡。自身の近況を伝えるとともに、当時読んでいた書物についての論評も書いている。とくに津田左右吉の文学史を批判する箇所「津田氏の文学史第一巻を見て居り候が、着眼の新らしきは喜ばしく存候　只訓練を欠ける独学者の弊到る処二見へ候は惜むべく候」が興味深い。

ここで朝河のいう第1巻は『文学に現はれたる我が国民思想の研究』 「貴族文学の時代」（洛陽堂、1916年8月刊）で、これから読むという第2巻は翌年1月刊行の「武士文学の時代」。



# 11. 朝河の東京専門学校転職の問題

朝河はイエール大学の財政危機で教職（任期付の助教授）を解任されそうになる。1920年7月頃、坪内宛に東京専門学校への転職を希望する書簡を送る。坪内は、1921年4月15日付の書簡で朝河の転職は難しいと返事をする。朝河はその後1923年以降、イエール大学大学院の西洋中世史の授業を担当することで教職を続けることができた。

一方で坪内は、朝河の東京専門学校への転職について1924年まで尽力していた。そのことは1924年7月15日付の朝河発坪内宛書簡（福島県立図書館蔵）からわかる。

参考文献：藤原秀之「坪内逍遙と朝河貫一 書簡を通じて見た学問上の交流」  
『日本史攷究』44号, 2020年

## 12. 渡米費用の借金を申し入れた渡辺熊之助宛書簡 [1894(明治27)年10月28日付]

朝河は借金はすべて返済した。



渡米を前にした壮行会の写真、  
福島県立図書館蔵

來秋は志を授て米國へ参げんとす。米國へ行けば別ち志の達せしむ  
とあるのみ、之に向ふべき方便を相ふすのみ。米國三層の大學の中最も秀  
でたる三層の格折るる大學に向見んとす、其の日や學ぶるも獅を存  
便あらんと必せり、世界の要衝の地に入ると是等の得ずん人をあまら  
まばけり、わが日本國の爲をなせんとす、且つ眼界を広く見識を  
高く得るの功強ち棄てざる、わが師友の望む所を行ふとす、強か  
る志強あらん。一生は長き一線路あれば、若行は又其間の一事なり、  
是れ一生の究竟はあらん、雖も之を結ぶの値はあらず。所望  
天地は金を數年分は地より得ん、若行は又其間の一事なり、  
君子預ふ所は其資を貸す人也。志望強期と又一期一箇一りの  
ま生、餘暇を用ひて二百余金を作すの難きを知らず。出資は其  
秋あれば今は只君が各書を短くし足れり。も難んば其一部より  
可也、何れ終はざるも強あらん、強は多額を貸せ、強は不足あり、  
予に命ずるべきも生何れ強あらん。も又君の心を待す、理ありて  
然し難し、是は強あらん、強は不足あり、強は不足あり、強は不足あり、  
又君が強は心より強あらん、強は不足あり、強は不足あり、強は不足あり、  
難きとわあらん、半生の修練をわがりの覺悟を達し、強は不足あり、  
又は書は卒るあらん、余は最深情を傾け、余は全身の力を以  
て君の強あらん、一片の果あらん、強は不足あり、強は不足あり、  
せ、生一の取つてきふ。  
貸せといふ、強あらん、強は不足あり、強は不足あり、強は不足あり、  
強は不足あり、強は不足あり、強は不足あり、強は不足あり、  
鳴平は書亦生が一生中の一事なり、君果してこれに之を後あらずか。天  
地至公の心、強は不足あり、強は不足あり、強は不足あり、強は不足あり、  
明治二十七年十月二十八日午後九時

渡邊熊之助殿

朝河貫一

## 13. ダートマス大学からイエール大学院へ



ダートマス大学学長ウィリアム・J・タッカーによる学費、寄宿舎費の免除の約束。坪内逍遙、大西祝、渡辺熊之助らから借金し、1896年(明治29年)12月横浜から出発。12月、ダートマス大学1年編入。歴史学への目覚め。主として西洋史を勉強する。タッカー学長は大学院で博士学位を取得し、ダートマス大学で東洋史を教えることを貫一に期待する。

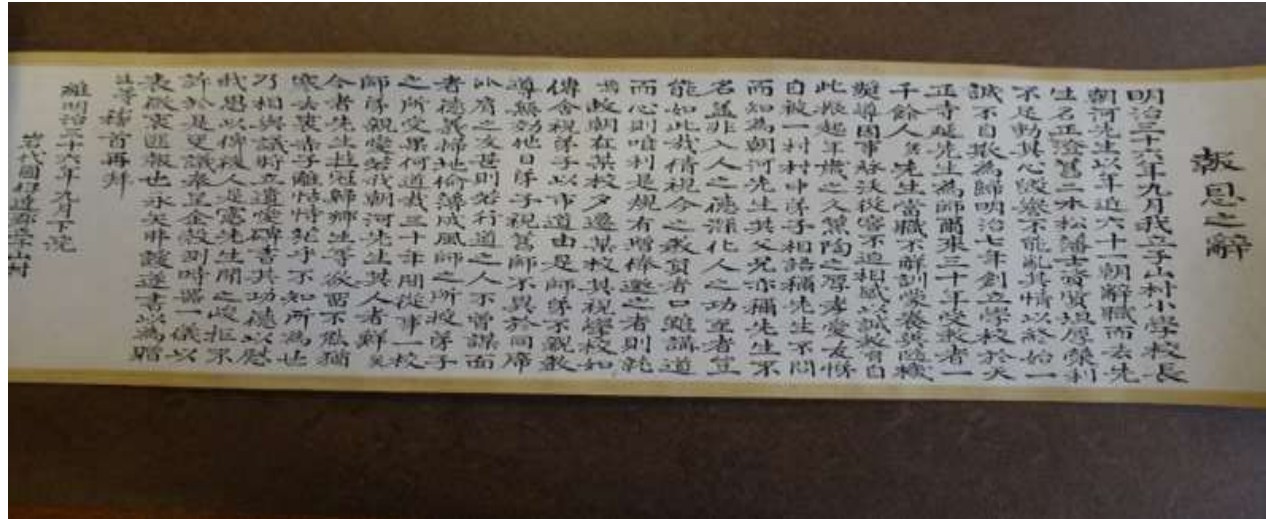


制度史研究を志し、イエール大学大学院へ。指導教員はフレデリック・ウェルズ・ウィリアムズ（ペリーの通訳のサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズの息子）。J.B.アダムズ教授の授業で西洋中世史に開眼。博士論文(1902年)---「大化改新」の研究(The Reform of 645:An Introduction to the Study of the Origin of Feudalism In Japan)。

写真(上) ダートマス大時代の和服姿。朝河は「サムライ」のあだ名で呼ばれる（イエール大学スターリング記念図書館蔵）。写真(下) ダートマス大卒業時の写真（福島県立図書館所蔵）。

## 14. 博士号取得からダートマス大講師へ, 父・正澄の退職

『報恩之辞』(Asakawa Papers, Yale University, Box59)



1902(明治35)年6月,貫一がイエール大学で「大化改新」により博士号取得。

同年9月,貫一はダートマス大学講師となる。

1903年7月,後妻エイが45才で病没。

正澄は妻エイの突然の死もあり,退職を決意する。

同年9月下旬,立子山村民から,記念品(大型金側懷中時計と金鎖)と感謝状と醵金者853人の名簿『報恩之辞』の奉呈。

同年10月29日,立子山小学校長を退職。

同年10月20日,朝河校長送別会の開催。

約1300人の立子山村民が参加。

正澄は二本松に移り住む。エイの姪・関根キヨが家事を手伝う。

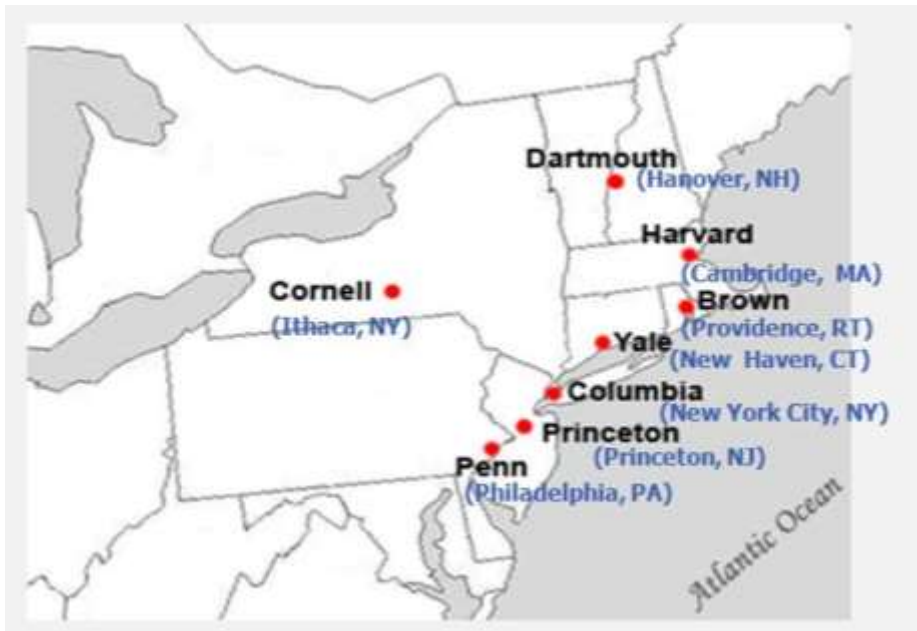


## 15.日露戦争中の活動

1902年,ダートマス大の講師就任。1904年2月,日露戦争勃発。戦争中,アメリカ東海岸の40か所以上で日本の大義について講演。

1904年8月, The Russo-Japanese Conflict: Its Causes and Issues(『日露衝突』)を出版。日露戦争に至る歴史的経緯についての英語による分析。

1905年8月,ポーツマスでの講和会議にオブザーバーとして滞在。賠償金のない講和を主張。



代表団が宿泊した「ホテル・ウェントワース・バイ・ザ・シー」



## 16. 貫一の第一回帰国と正澄の死

写真 帰国時の二本松での集合写真  
(安達ヶ原ふるさと村先人館)



1906年(明治39年)2月16日,横浜港に到着。  
父正澄と再会。3月1日,郡山。3月2日,二本松。  
3月5日,福島公会堂で講演。聴衆は約500人。  
角田柳作も出席。9月20日,正澄が腸ねん転に  
より61歳で死去。

貫一は三日,七日の供養を済ませ,立子山を訪問。  
天正寺に一泊する。

翌日,立子山小学校講堂で「朝河博士帰朝大歓迎  
会」が開催され,貫一が演説を行う。  
ダートマスやイエールの大学生のことや日露戦争  
を語る。東京専門学校で英語の講師を務め,イエール  
から依頼された図書蒐集を行う。

1907年8月7日,横浜港よりアメリカに帰る。  
1907年(明40)8月,米国に帰る。帰国後,イエール  
大学講師。

## 17. 『日本之禍機』（1909年）の刊行

朝河は帰国時に、日露戦争後の日本社会の変化に驚く。  
1909年にアメリカで『日本之禍機』を執筆し、坪内逍遙に送り、日本で出版。

朝河は最初、この書物の原稿を「日本之危機」の題名で坪内に送ったが、坪内の提案で題名は『日本之禍機』に変えられ、1909年(明治42年)に実業之日本社から出版。

日露戦争前、日本は二大原則（清国の主権、機会均等）を掲げロシアと戦ったが、戦争後、それに反した行為を行い、国際社会から孤立している。日本は「新外交」の理念に立ち返るべき。満州、韓国で、中国やアメリカと戦争になれば、世界に孤立する独善的国家、文明の敵として戦うことになる。

